掲載日:2019年11月16日, 面名:長岡, 記事ID:KIJ20191116_M001900100BK08001
(C)新潟日報社

栃尾の地域おこし協力隊員

巨大クジラ観光客集まれ

廃材アート制作進む

全長20メートル SNS拡散目指す

長岡市の栃尾地域で活動する地域おこし協力隊の加治聖哉さん(23)＝同市栃尾本町３＝が、刈谷田中近くの田んぼ脇に、クジラの廃材アートを制作している。全長は約20メートルで、会員制交流サイト（ＳＮＳ）で紹介される作品を目指す。来春の大型連休前に完成する予定で、観光客の呼び込みを狙う。「迫力のあるクジラを造って、多くの人が栃尾に来るきっかけにしたい」と意気込んでいる。

加治さんは村上市出身。長岡造形大を卒業後、東京で芸術作品の販売会社に１年勤めた。７月に栃尾地域に移り住み、木工作品のワークショップや９月にあったトチオノアカリなどの地域行事を手伝ってきた。

「海の生き物が山にいたら面白い」と考えていたところ、１９８３年に栃尾地域の半蔵金地区でクジラの化石が見つかったことを知り、実物大のザトウクジラを造ることを決めた。「本物のクジラを見たことがある人は少ないと思う。水族館にもいないクジラを見てもらうために忠実に作っている」と説明する。

地元の工務店から、古くなった住宅の小屋を取り壊したときに出た廃材を譲り受けた。９月末に制作を始め、のこぎりで40～50本を部品に応じた長さに切り分け、ねじでつなぎ合わせている。すでに骨組みの大部分は出来上がっており、大きさをうかがうことができる。

骨組みが完成した後は、体に丸みを付けて立体感を出すために、細い木材を張り巡らせ、表面に板を取り付ける。細部にもこだわり、ひげやクジラの皮膚に付くフジツボなども再現する予定だ。

「人通りがあるところに巨大なクジラがいるので目を引く。ＳＮＳで拡散してもらうための仕掛けを考えていきたい」と力を込めた。

ザトウクジラのアートを制作している加治聖哉さん＝長岡市巻渕２